



福岡県生まれ。1975年九州大医学部を卒業。松山赤十字病院医師(愛媛県)などに勤務。北九州市立医療センター心臓血管外科部長、国立病院機構九州医療センター心臓血管外科医長などを経て、05年から現職。九州大病院の副院長、ハートセンター長も務めた。第67回日本胸部外科学会会長、日本外科学会理事。

日本人の平均寿命が延び続けています。2013年は女性が86・61歳、男性が80・21歳でした。各国・地域の最新統計と比べると、女性は1位、男性は4位です。国民皆保険制度や優れた医療が、世界有数の長寿を支えているといえるでしょう。

富永 隆治 九州大大学院医学研究院循環器外科教授

富永 隆治 九州大大学院医学研究院循環器外科教授

新たな医療職創設急務

ようになりました。各診療科のなかでも、外科は一人前の医師になるまでに長期の研修が必要で、難しい手術をして、報酬が低いこと、訴訟を起こされるリスクがあること、緊急の呼び出しを含め、労働時間が長いことなどから、若手医師からは、敬遠される傾向にあります。全体の医師数は漸増しているのに、産科医とともに、外科医は減少しているのです。医師が減少すれば、臨床現場はさらに過重労働となり、若手医師が外科に二の足を踏むという「負のスパイラル」に陥ります。難しい手術をして、報酬が低いこと、訴訟を起こされるリスクがあること、緊急の呼び出しを含め、労働時間が長いことなどから、若手医師からは、敬遠される傾向にあります。全体の医師数は漸増しているのに、産科医とともに、外科医は減少しているのです。医師が減少すれば、臨床現場はさらに過重労働となり、若手医師が外科に二の足を踏むという「負のスパイラル」に陥ります。

富永 隆治 九州大大学院医学研究院循環器外科教授

勤務明けの手術も日常的に行われていました。外科医は強い責任感を持ち、時間を考えずに診療に当たることが当然とされてきました。が、過労は医師の健康を損なうだけでなく、医療事故を引き起こす恐れがあります。米国では事故を防止するため、①週80時間を超えない勤務時間②週1回の完全にフリーな休日の確保③連続勤務時間の上限設定——がなされています。

わが国でこれを実現するためには、看護師、医療秘書など、医療スタッフの充実がもとより、より高度の医療行為ができる、医師と

看護師の中間職種の新設は急務になっていきます。今年6月の国会で、「特定行為に係る看護師の研修制度」が法制化され、ようやくその道が開かれたといえます。

12年のアンケートでも、外科医の労働環境は第1回調査(07年)とほぼ同じ状況でした。1週間の平均労働時間は78・5時間で、週80時間以上が40%にのぼりました。過労死の認定基準(週60時間以上)に達するケースが75%を超え、当直

第67回日本胸部外科学会術集会在9月30日から10月3日まで、福岡市で開かれたのに合わせ、12月13日午後2時から福岡市・天神のFFGホールで市民公開講座を企画しました。テーマは「患者さんに優しい胸部外科」です。多忙な業務の中でも、外科医は研究に取り組み、最新の医療を学んでいます。心臓や呼吸器、食道の専門医が「外科医療の今」を披露します。みなさまのご来場をお待ちしています。

富永 隆治 九州大大学院医学研究院循環器外科教授

富永 隆治 九州大大学院医学研究院循環器外科教授